



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	信仰なき聖地巡礼 : サンティアゴ・モデルの拡散
Author(s)	岡本, 亮輔
Citation	宗教研究, 94(2), 57-80 https://doi.org/10.20716/rsjars.94.2_57
Issue Date	2020-12-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80112
Type	journal article
File Information	okamoto2020.pdf



信仰なき聖地巡礼

——サンティアゴ・モデルの拡散——

岡 本 亮 輔

〈論文要旨〉 二一世紀以降、サンティアゴ巡礼路には様々な背景を持った世界中からの巡礼者が集まるようになったが、その多くは信仰なき巡礼者である。彼らにとって大聖堂の聖遺物は巡礼の目的にはなり得ず、巡礼過程での交流体験とそれがもたらす気づきや自己変革が重視される。本稿では、こうした状況を伝統宗教の枠組みからの離脱という意味で、信仰の背景化として捉える。そして、サンティアゴ巡礼をモデルとして展開する日本の聖地巡礼にも、信仰を過去のものとし、現在についてはスピリチュアルな語りをするパターンが見出せ、さらに、この種の言説が、伝統信仰の担い手である宗教者によっても紡がれることを確認する。

〈キーワード〉 宗教とツーリズム、スピリチュアル、サンティアゴ巡礼、熊野古道

一 問題の所在

西欧の現代宗教を考える際に聖地巡礼を一つの焦点とする理由は、世俗化に反比例するようにその裾野を広げてきたことに求められる。例えば、二〇〇五年時点でイギリスの教会出席率は六・四％と既に低水準にあったが、その後も毎年約〇・一％ずつ低下し続けており、二〇三〇年には四・〇％、人数換算では二四〇万人しか教会に通わなくなると推定されている。⁽¹⁾ ステイプ・ブルースは世俗化の具体的指標を六つ示しているが、その一つが「人々が超自然的なものに使う時間やエネルギーが減少する」というものであり、⁽²⁾ 教会出席率の低下はまさにこの指標に合

致する。

そして、同様の教会離れが西欧諸国で不可逆に進展するように思われる中、二一世紀に入ってから多くの人々を集めてきたのが聖地巡礼だ。とりわけ興隆著しいのがスペイン西北部のサンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂を目指す巡礼（以下、サンティアゴ巡礼）である。イギリス国籍の年間巡礼者数（巡礼者数の定義については後述）を見てみると、二〇〇四年は一四〇〇人程度であったが、二〇一九年には九千人を超えている。確かに減少したと言っても、イギリスの教会出席者数は現状三〇〇万人弱と見積もられ、それと比べれば少ない。だが、そもそも多くのイギリス人はカトリックを背景とせず、さらに巡礼者の多くが数週間から一カ月程度かけて聖地まで数百キロメートルを歩くという意味で多大な時間とエネルギーを割いており、その点において十分に興味を引く現象なのである。

もちろん、聖地巡礼の興隆がそのまま宗教復興を意味するわけではない。むしろ、世俗化を経たからこそ、聖地巡礼に人が集まるようになったと言える。既往研究でも、制度宗教の聖地管理能力が低減したことで、聖地において聖俗双方の諸アクターが交錯し、聖地はそれらのアクターの実践や意味づけが競合する場になること、伝統信仰の枠組みに収まりきれない気づきや体験が生じていること、さらに消費文化をはじめとする世俗の働きかけによる宗教変容などが指摘されている。⁽⁵⁾ 本稿においては、これらの問題意識を引き継ぎながら、ポスト世俗化の聖地巡礼における多様性や聖俗混交を下支えする信仰の背景化について考えてみたい。

サンティアゴ巡礼は、巡礼者数の増加具合やメディアでのイメージなどから、現代において最も成功した聖地巡礼の一つと言える。サンティアゴ巡礼が多くの人を惹きつけ、学術書からフィクションまで種々のメディアで好意的に取り上げられる大きな理由は、その巡礼路が開かれた空間として語られることにあるだろう。例えば、あるス

ペイン人の美術史家の著書では、「サンティアゴ巡礼の道は、現在においても、この世界、全人類、そして神に対する愛と助け合いの精神を守り続けて」おり、さらに「この巡礼の道によって、寛容性が高く、慈悲の心に満ち、歓待の精神にあふれた、人間として最高に幸福な精神が生み出され」たと詩的に論じられる⁽⁶⁾。確かにサンティアゴ巡礼路には毎年一〇〇以上の国からの来訪者があり、少数ながらイラン、イラク、オマーンといった国籍の巡礼者も存在する。こうした現状を鑑みれば、カトリックか否かという教派だけでなく、宗教を超えた多様性や寛容性を賞揚したくなるだろう。

本稿では、このような開かれた巡礼イメージを生み出しているのが、伝統的な信仰(者)の背景化であることを指摘してみたい。というのも、サンティアゴ巡礼では、キリスト教に限らず、信仰が問題になる局面はほとんど見当たらず、むしろ伝統的な信仰(者)を忌避するような言説が見られるのである。以下では、現代サンティアゴ巡礼の特徴を概観し、現在進んでいるのは巡礼という実践と伝統信仰の分離であることを確認し、その上で同様の傾向が日本の聖地巡礼にも見出せることを論じてみたい。

二 現代のサンティアゴ巡礼

サンティアゴ大聖堂は、使徒ヤコブの遺骸を聖遺物として祀る。伝承によれば、九世紀初頭にヤコブの埋葬地が発見され、最初の教会堂が建設された。この時期は国土回復戦争と重なり、ヤコブのイメージは、サンティアゴ・マタ・モーロス（ムーア人殺しの聖ヤコブ）として広まる。苦戦を強いられたキリスト教勢力に、白馬に乗った騎士姿のヤコブが加勢し勝利に導いたという伝説だ。こうした経緯からヤコブはスペインの守護聖人とされ、巡礼路

上の教会にも剣を持って戦う様子を描いた絵や彫像が残されている。ヤコブという宗教表象は、歴史的には越境や寛容とは真逆のナショナリズムや宗教的排他性と結びつく可能性が高いものと言えよう。

その後、ヤコブの聖遺物を目指す巡礼が中世を通じて活発になり、サンティアゴはエルサレム、ローマに続くカトリック第三の聖地とされるが、その状況が現代まで絶え間なく続いてきたわけではない。実際には、ヤコブの聖遺物は途中で紛失され、再発見されたのは一八七九年である。科学的調査の後、一八八四年の教皇レオ一三世の大勅書によって真正性が保証された。一九八二年のヤコブの聖年には、ヨハネⅡパウロ二世も大聖堂を訪れているが、それでも一九八六年の巡礼者数は二五〇〇人足らずだったのである。

統計から見るサンティアゴ巡礼の変質

サンティアゴ巡礼では、巡礼を完遂したかどうかに関して明確な基準がある。大聖堂を起点に徒歩か馬で一〇〇キロメートル以上、自転車で一〇〇キロメートル以上旅した者に対して「巡礼証明書」が発行されるのだ。その発行数の推移は図1の通りである。⁽⁷⁾ ヤコブの日（七月二十五日）が日曜にあたる聖年に突発的に巡礼者が増えているが、一九九八年でも約三万人だ。一方、二〇〇〇年代以降の増加は顕著である。二〇〇〇年に五万人、二〇〇六年に一〇万人、二〇〇九年に一五万人、二〇一五年に二六万人、そして二〇一八年に三三万人と爆発的に増加し、最新の二〇一九年は三五万人弱である。一九九一年（七二七四人）から三〇年弱で五〇倍近くに増えている。

国籍別に巡礼者を見ると当然ながらスペインが最多だが、二〇〇〇年代以降、その割合は低下し続けてきた。二〇〇四年には七六％がスペイン国籍だったが、二〇〇七年頃から五〇％を下回るようになり、二〇一九年には四二％まで下落している。巡礼者数の上位を占める国の推移は図2の通りである。ヴァチカンを抱えるイタリアが多

信仰なき聖地巡礼

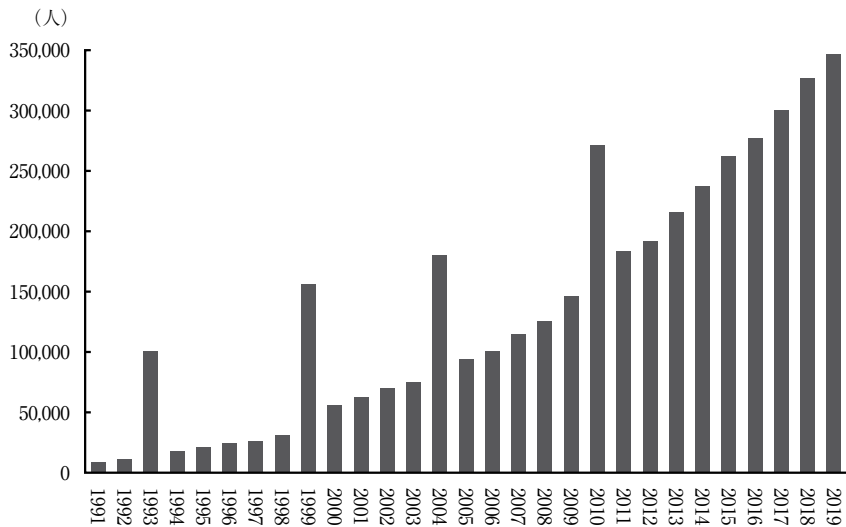


図1 巡礼証明書の発行数 1991～2019年

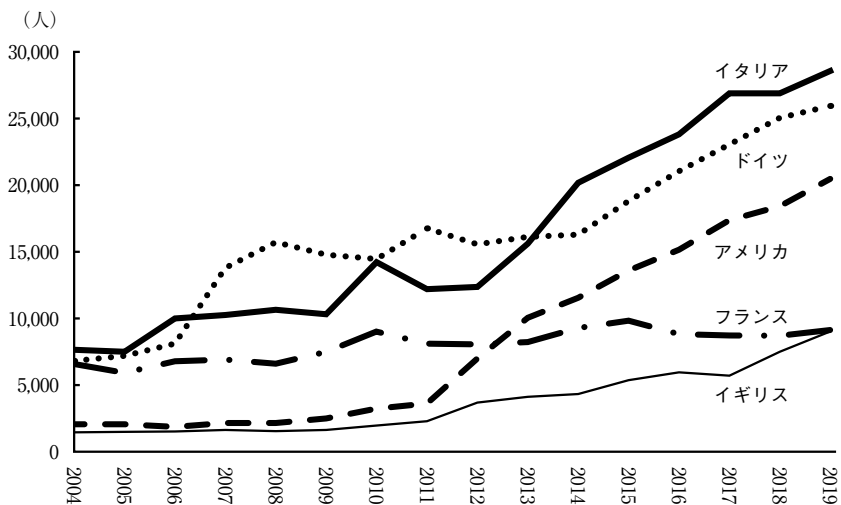


図2 国別の巡礼者数 2004～2019年

(サンティアゴ巡礼者受付事務所の統計に基づき作成)

いが、ドイツがそれに次ぎ、二〇一〇年代初頭まではイタリアを上回っていた。フランス国籍は一人弱で一定し、近年ではアメリカ国籍がフランス国籍の倍ほどもいる。そしてイギリス国籍も順調に増加し続けた結果、現在ではフランス国籍に匹敵する数になっている。

サンティアゴ巡礼は、二〇〇〇年代以降、急速にグローバル化したが、その活況はスペイン国外からの巡礼者増加によってもたらされたと言える。いずれも全体に占める割合は1%未満だが、地理的・宗教文化的に遠い日本国籍（二〇一九年一四五二人）やフィンランド国籍（同年七五五人）の巡礼者数も増加してきた。さらにアジア圏で最も多い韓国国籍の場合、二〇〇〇年代前半には数十人程度であったが、二〇一九年には八二〇〇人超に急増しているのである。

巡礼の動機

なぜ、サンティアゴ巡礼は、世俗化に逆行するように急速に活性化したのだろうか。二〇一〇年の聖年の際、当時の教皇ベネディクト十六世がサンティアゴ大聖堂を訪問し、その後の一般謁見演説で次のように述べている。

わたしは深い喜びをもってサンティアゴで荘厳なミサをささげました。ミサにあずかった多くの巡礼者を前にして、わたしは次のことを考察しました。多くの人に、日々の仕事を捨てて、コンポステラへの悔い改めの道を（この道は時には長く労苦が多いにもかかわらず）歩ませたのは何か。それは、キリストの光に達したいという望みです。たとえことばで十分に言い表すことができなくても、人々はこのキリストの光に心の奥底からあこがれているからです。失意のとき、何かを探し求めるとき、困難なときに、また、信仰を強め、より一貫した生き方をしたいと望んで、サンティアゴ巡礼者たちはキリストへの回心のための長い旅路を歩みま

す。キリストは、人類の弱さと罪と世の苦しみを身に負って、それらを、悪がもはや力を振るうことができず、いつくしみの光がすべてのものを照らすところへともたします。世界中から来た、沈黙のうちに歩む巡礼者が、カトリック信仰に満たされた村や町を回りながら、巡礼というキリスト教中世以来の伝統を再発見しています。⁽⁸⁾

これに続けて「キリストへの信仰こそが、コンポステラという特別な霊的場所に意味を与えます」とも語っている。カトリック教会の公式見解では、巡礼路は聖遺物を目指す信仰者で満たされているというわけであるが、実際は異なる。巡礼証明書の発行の際、巡礼者は、国籍などに加えて、巡礼を始めた動機を①宗教的動機 (Religioso)、②宗教及びその他の動機 (Religioso y otros)、③非宗教的動機 (No religioso) の三択から申告する。聖年の二〇〇四年には七五％が①を選択しているが、それ以外では①は五〇％を下回り、②が最も多い。二〇一九年の場合、①四〇％、②四九％、③一一％となっている。

確かに②にも「宗教」の文言があり、①と②を合わせれば九割近くが宗教的動機から巡礼を行っているように見える。だが、実は①②と③では発行される証明書が異なる。①②については「コンポステラ」と呼ばれる巡礼証明書が発行されるが、③を選択すると条件未達成でも貰える「歓迎証」が発行されるのだ。そして、ほとんどの巡礼者は証明書発行に関するこの事情を知っており、自らの動機を①か②で申告するのである。

巡礼に関する情報発信を行う組織として、日本ではNPO法人日本カミノー・デ・サンティアゴ友の会が代表的である。同会のウェブサイトには、巡礼証明書と歓迎証の違いの説明の後に、「キリスト教信者ではない人が『巡礼証明書』をもらうことについて」という文章が掲載されている。

問題はありません。言われているように、この巡礼路はキリスト教徒以外の人にも開かれています。一人ひとりの信者の方の心情は分かり兼ねますが、「筆者注Ⅱ巡礼者受付」事務所の話では、信者で無い人がこの証明書をもらうことに対してネガティブな気持ちは無い、とのこと。反対に、この巡礼をすることで少しでもキリスト教に触れ、関心を持つてくれればそれに越したことは無い、という考えです。⁽⁹⁾

サントイエゴ巡礼路は宗教的越境の場であり、巡礼者は無名のキリスト者的な存在であるから、宗教的動機で申告するのに躊躇は不要というわけである。だが、そもそも巡礼証明書へのこだわり自体が、巡礼と信仰の分離を示唆しているだろう。本来、信仰者にとって巡礼の過程は重要ではない。目的は聖遺物を前に祈ることであり、そこに至る道程や交通手段を問うことに信仰上の意味はないはずである。

いずれにせよ、申告される巡礼の動機は、実態をほとんど反映していない。むしろ、確固たる信仰を持つ人が①以外を選ぶ理由がないことを考えれば、明確に宗教的動機から巡礼を始めた人は、四〇%よりも遥かに少ないと考えるべきだろう。

メディア作品が方向づける巡礼体験

それでは、宗教を動機としない巡礼者たちは、なぜ巡礼を始めたのか。多くの巡礼者がきっかけとして挙げるのがメディア作品である。最も早いものとしては、ブラジルの作家パウロ・コエーリョが自らの巡礼体験を下敷きに創作した『星の巡礼』（一九八七年）があるが、同作はその後のコエーリョ作品のベストセラー入りを受けて、各国で読まれるようになったものである。より影響力が大きかったのは、ハリウッド女優シャーリー・マクレーンによる『カミーノ——魂の旅路』（二〇〇〇年）だろう。

重要なのは、右の二つがキリスト教信仰者の立場から書かれた作品ではないことだ。『星の巡礼』では、秘密結社に属する主人公がマスターになるための最終試験に失敗し、その追試として巡礼に赴く。『カミーノ』は、より実際のマクレーン巡礼体験に即して書かれているが、前世の体験や守護霊との邂逅といった出来事が語られる。コエリヨとマクレーンは、ニューエイジ文化のキーパーソンだ。キリスト教信仰の文脈から逸脱しているという意味でスピリチュアルな彼らの作品が、教会離れが進む最中、巡礼という宗教者の介在が希薄な実践の魅力を拡散したと言えるだろう。

映画では、『サン・ジャックへの道』（二〇〇五年）や『星の旅人たち』（二〇一〇年）が広く知られている。『サン・ジャックへの道』は信仰を全く持たないグループの巡礼行を描いた作品である。仕事中毒の会社経営者の兄、カトリックを毛嫌いする国語教師の妹、失業者でアルコール中毒の弟の三兄弟が、遺産相続の条件として仕方なく巡礼に出る。巡礼を共にする他のメンバーも、卒業旅行で来た女子高生や彼女たちを目当てに参加したムスリムの高校生などである。

『星の旅人たち』は、女優マーティン・シーンが演じる高齢男性の巡礼を描いた作品だ。この作品でも主人公は自発的に巡礼を始めるわけではない。その合わなかった息子が大学院を中退し、自分探しのためにサンティアゴ巡礼に出るのだが、巡礼を始めてすぐに事故で亡くなってしまう。当初その意思はなかったが、主人公は息子の装備を身につけ、道中、遺灰をまきながら代わりに巡礼を行うという物語だ。エンディングでは反発していた息子の価値観に気づき、主人公も世界を旅するようになったことが示唆される。

三 背景化する信仰

二〇〇〇年代以降のサンティアゴ巡礼の興隆は、自分探し、新たな人生観の発見、そして教会的信仰からの逸脱という意味でスピリチュアリティを主題とするメディア作品によって支えられてきた。こうしたタイプの巡礼作品として最も成功したのが、二〇〇六年にドイツで出版された *Ich bin damn mal weg: Meine Reise auf dem Jakobsweg* である。

著者のハーベイ・カーケリングは、ドイツで広く知られたコメディアンであり、同書は人気絶頂の二〇〇一年に休業して巡礼を行った時の体験記だ。ノンフィクションとしては戦後ドイツで最高となる三〇〇万部以上を売り上げた。英語・オランダ語に翻訳され、日本でも二〇一〇年に『巡礼コメディ旅日記——僕のサンティアゴ巡礼の道』として刊行されている。同書でも、伝統的なカトリック信者は巡礼の前後で変化しない人々として懐疑的に扱われ、むしろ仏教への親近感が語られている。

注目したいのは、カーケリングが巡礼を始めたきっかけがマクレーンの著作であったことだ。先行する非カトリック的な巡礼作品が、さらに後続の非カトリック的な巡礼体験を生み出すというサイクルが見出せるのだ。そして、ドイツ誌『デア・シュピーゲル』のベストセラーリストに一〇〇週以上入り続けたカーケリングの作品も、多くの追隨者を生み出した。ドイツ国籍の巡礼者について見てみると、カーケリングの巡礼記が刊行された二〇〇六年には八〇九七人であったが、翌二〇〇七年には、ドイツ国籍者だけが一万三三八七人に急増しているのである。

引き延ばされる巡礼過程

それでは、こうした信仰なき巡礼者たちは、より具体的にはどのような体験に価値を見出しているのだろうか。この点を考えるために、実際の旅の様子を少し見てみよう。

まず巡礼ルートであるが、フランス南西部のサン・ジャン・ピエ・ド・ポーを出発してピレネーを越え、パンプローナ、ブルゴス、レオン、アストルガなどを通るカミーノ・フランセス（フランス人の道）の人氣が高い。前述の通り、巡礼証明書の取得には徒歩・馬・自転車などの方法があるが、ほとんどは徒歩である（二〇一九年は約九四％）。八キロ前後の荷物を背負い、毎日二〇キロメートル前後進む。巡礼者は「クレデンシヤル」というスタンプ帳を携帯している。宿、カフェ、レストランなどにスタンプがあり、道中で集めたスタンプが巡礼証明書を発行してもらう際の証拠となる。

巡礼者のほとんどは、スペイン語で「アルベルゲ」と呼ばれる巡礼者専用の施設に宿泊する。ユースホステルのようなもので、二段ベッドとシャワーが基本的な設備だ。国・州政府・地方自治体・民間・教会などによるものがあるが、宿泊費は全般的に私立が高く、公営・教会営のものは安い。アルベルゲへの到着はだいたい一三時から一八時くらいまでで、二二～二三時頃に消灯となる。原則として一カ所に一泊しかできず、病気・怪我など特別な事情以外での連泊は認められない。

徒歩巡礼のための施設は年を追うごとに充実し、巡礼路沿いにカフェ、レストラン、アルベルゲが作られてきた。注目したいのは、カミーノ・フランセスに行く巡礼者が一貫して最多であるが、その割合は徐々に減少してきたことである。二〇〇八年には八〇％近くがこの道を使ったが、二〇一九年には五四％に低下している。かつては

カミーノ・フランセスに巡礼者用の施設が集中しており、他ルートに行くのは困難であった。だが、巡礼人気の高まりと共に他ルートにも施設が増え、ヴァリエーション・ルートに行く人が増えたのだ。こうした変化も、巡礼過程そのものを重視する傾向として理解できるだろう。

先述の通り、本来は信仰者にとって巡礼過程は重要ではない。最重視すべきは大聖堂に安置された聖遺物であり、むしろそこまでの道程は簡略である方が望ましいはずだ。しかし、信仰なき巡礼者にとって、ヤコブの遺骸は目的にはなりえない。その結果として生じているのが、道程の簡略化とは逆に巡礼過程を引き伸ばそうとする傾向である。それが顕著に現れているのが、近年になって始まった「距離証明書」の発行だ。巡礼者受付事務所によれば、巡礼のより詳細なデータを記載して欲しいという要望が多く、それに応えて二〇一四年から発行されるようになったものである。⁽¹⁰⁾

距離証明書発行の二十年前は、状況は大きく異なっていた。実際に起きた問題として、巡礼証明書発行の際、西洋人の容姿をしていない巡礼者だけがキリスト教徒であるかどうかを問われ、正直に非信者であることを告げると、条件を満たしていたにもかかわらず、証明書が発行されなかったというものが挙げられる。⁽¹¹⁾ 一九九〇年代半ばには、人種差別とも結びつく形で、巡礼路は信仰的にある程度閉じられていたのだ。それに対して、出発地と踏破距離を記載した距離証明書は巡礼のスポーツ化を黙認するとすら言えるもので、二一世紀以降の活性化によって、信仰が急速に背景化したことがうかがえる。

交流体験とルールとしての大聖堂

メノナイト派の神学者アーサー・P・ボアーズは、巡礼記『歩いて道は作られる』において、サンティアゴ巡礼

にはカトリック信仰とは異なる信頼と協働という特有の価値観が見出せるとしている。会ったばかりで名前も知らない人と食住を共にし、親密なコミュニケーションをとるのが現代サンティアゴ巡礼の特徴だというのである。⁽¹²⁾ ボアーズは、自分が足を怪我した時のエピソードを挙げている。ボアーズは、ある女性巡礼者と知り合ってしばらく一緒に歩いていた。彼が怪我をして歩みが遅くなると、女性は面倒をみるのをためらい、独りで先に行ってしまう。だが、しばらくすると戻って来て、予定変更してボアーズを病院に送り届け、治療にも立ち会ってくれたのである。

ボアーズは、現代の巡礼者がこの種の交流体験を重視していることを踏まえ、巡礼路そのものの神格化を指摘している。右のような出来事があると、「まあ、それがカミーノさ」といった言葉で、巡礼ではしばしば生じうることとして納得される。逆に言えば、日常生活では見られないこうした体験が頻繁に生じるからこそ、サンティアゴ巡礼路は特別な空間に感じられるというのだ。筆者がインタビューした日本のサンティアゴ友の会の主要メンバーによれば、会員のほとんどはカトリック信仰をもっておらず、「ヤコブへの献身」という意識はほとんど見られない。その代わりに、会員同士の会話では「カミーノ教」という言葉が頻繁に出るという。交流体験を与えてくれる巡礼過程そのものを重視する姿勢を端的に言い表した表現と言えるだろう。

興味深いのは、こうした巡礼イメージや語りがカトリック信者にも影響していることだ。筆者が同行調査したバス巡礼団は、スペイン人司祭二人が引率するもので、参加者全員が日本人のカトリック信者であった。フランス南部の聖地ルルドを出発し、数日かけてサンティアゴまで走るツアーであったが、道中、車窓から徒歩巡礼者たちが見える。多くのツアー参加者は車窓から歩く巡礼者たちを撮影し、「彼らこそが本物の巡礼者である」といったこ

とを語る。さらには、ツアーの予定を変更してアルベルゲを訪れ、歩き巡礼の擬似体験をするような場面も見られたのである。⁽¹³⁾

人類学者の土井清美は、現代のヤコブをゲームにルールを与える指標として分析する。元来、最大の目的だったサンティアゴ大聖堂への到着は、信仰なき巡礼者たちにとって本質的な動機にはなりえない。土井によれば、サンティアゴ巡礼に関してスペイン語で「ベルグリノス（巡礼者たち）」と言われる時には、「聖地に直行しない人々」というニュアンスすら含まれるようになっていく。⁽¹⁴⁾とはいえ、スペイン国内だけでなく、西欧を網の目のように覆う巡礼路を各人がただ歩き回るだけでは意味がない。そこに「西へ向かう」というシンプルなルールを与えるのが大聖堂なのである。

最低限の縛りとして大聖堂があることで、信仰の有無とは無関係に「巡礼者」という肩書が有効化され、それによって巡礼路ならではの交流体験が可能になる。巡礼者のインタビューや巡礼記では、大聖堂に到着したくない、目的地であるサンティアゴに到着しても大きな感慨はなかったという語りも見られる。現代のサンティアゴ巡礼において、聖ヤコブという宗教表象は、信仰なき巡礼者たちの交流の背景に転じているのである。

四 サンティアゴ化する日本の巡礼

巡礼者という肩書が形骸化し、信仰不問であるからこそ、サンティアゴ巡礼は様々な人々に開かれ、特有の体験をもたらず場となった。本節では、こうしたサンティアゴ巡礼のあり方が、日本の一部の聖地巡礼に時として戦略的に取り込まれ、それによって信仰の背景化と呼べる同様の傾向が見られることに注目してみたい。以下では、世

界遺産登録やそれを目指す運動の過程で、巡礼過程の重視や信仰の背景化が指摘できる三つの事例を取り上げる。

まず、早くからサンティアゴ巡礼を意識しながら世界遺産登録運動を展開してきた熊野古道について見てみよう。熊野古道は紀伊半島に広がる本宮・新宮・那智の熊野三山への参詣道であり、二〇〇四年、「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界文化遺産に登録された。世界遺産登録以後、田辺から本宮へとつながる中辺路を中心に、大辺路、小辺路、伊勢路などを訪れる人が増加した。伊勢路について見てみると、暫定リストに掲載された二〇〇一年の来訪者数は六万八千人であったが、正式登録の二〇〇四年には一五万人に急増し、二〇一五年以降は三〇万人を超えている¹⁶⁾。この数は日帰り客も含めた来訪者数であり、サンティアゴ巡礼の巡礼証明書の発行数とは意味合いは異なる。だが、二〇一一年には『ミシユラン・グリーンガイド・ジャポン』で熊野古道が三つ星を獲得するなどし、外国人の来訪者も増やしてきた。

「紀伊山地の霊場と参詣道」は、点在する寺社だけでなく、それらを結ぶ三〇〇キロメートル超の熊野古道も構成資産とする。登録活動が行われた当時、道そのものを構成資産とする物件は一九九三年登録のサンティアゴ巡礼路しかなく、その推薦書を参照して道の両側五〇メートルをバッファゾーンとするなど、当初からサンティアゴ巡礼が手本にされていた。だが本稿が指摘したいのは、形式上の類似点だけでなく、巡礼をめぐる言説において、伝統宗教からの離脱という意味での信仰の背景化が見出せることである。

世界遺産登録から六年後、小田誠太郎が増加する来訪者や地域住民に対して違和感を示している。小田は仏教美術を専門とし、和歌山県のスタッフとして世界遺産登録の実務を担った人物だ。小田によれば、文化遺産として紀伊山地を見た場合、サンティアゴ大聖堂のような傑出した建築物があるわけではなく、一目ではその価値はわから

ない。神道・仏教・修験道といった様々な「信仰の起源をなした特徴的な自然と社寺の建物・境内が一体となって形成している『文化的景観』」こそが価値であり、⁽¹⁶⁾したがって、それを理解するには、信仰や歴史についての膨大な知識が必要となる。だが、来訪者のほとんどはそうした点に関心はなく、さらには遺産管理を担う地元市町村や社寺の職員も同様だというのである。

過去の信仰と現代のスピリチュアル

それでは、急増した来訪者やそれを受け入れる地元の人々は、熊野古道をどのように語り、体験しているのだろうか。

「紀伊山地の霊場と参詣道」の構成資産の中核の一つが熊野本宮大社であるが、そのすぐそばに「世界遺産熊野本宮館」がある。世界遺産登録五周年を機に和歌山県と田辺市によって作られた施設で、熊野古道についての情報提供を主目的とする。この施設内に熊野本宮観光協会があり、そのウェブサイトのトップに中辺路を紹介する文章がある。中世の熊野詣に関する簡単な説明だが、文章の最後は「近年は『パワースポット』としても注目される熊野を、みなさんも歩いてみませんか?」と結ばれる。⁽¹⁷⁾そして、実際に歩くためのガイドとして「熊野本宮語り部の会」が紹介される。

語り部の会は一九九〇年代に始まった活動で、養成講座を修了した案内人のグループである。熊野古道への来訪者と直に接する人々であり、語り部の同行ツアーの人気は高い。同会ウェブサイトでも熊野の見所が詳しく紹介されるが、明治期の水害まで本宮大社があった大斎原^{おおののはら}について、「しかし、この地に立つてみるとまず空気が違う。社殿が移築された後でも、何かを感じさせる不思議なパワーが今なお存在する」と書かれている。⁽¹⁸⁾

これらに共通するのは、中世・近世など過去については伝統信仰が歴史として示されるが、現在についてはスピリチュアルな語りが前面に押し出されることである。そして、この種の言説は公的組織にも見られる。世界遺産登録された二〇〇四年には、熊野古道が持つ癒し効果を科学的に証明する調査が行われている。国土交通省近畿運輸局企画振興部が主体となり、三重県、和歌山県、大学や民間の研究機関等の協力を得て実施されたもので、その報告書では大斎原は次のように論じられている。

理想的な風水地形である『大斎原』には、人々が特別な場所であると感じる「聖地の力」が感じられる。旧社地（大斎原）の復活は、地域再生への重要な要素である。

『祈り』と『癒し』とは、まさに宗教と医療ということであり、根源的に同質であるこれらの融合が（現代人の根源的な心身の治療には）重要である。『祈り』と『癒し』の連携により、既存の熊野参詣客を、癒し型の長期滞在へと誘引していくことが可能となる。⁽¹⁹⁾

そして、熊野古道を地域の「癒し文化」資産⁽²⁰⁾として捉え返し、熊野を「世界に発信できる癒し文化基地」として再活性化することが目標として示されるのである。さらに、この報告書を参考にして和歌山県が作成したパンフレット「熊野古道健康ウォーキング」では、先の語り部や「熊野セラピストと呼ばれる癒しの健康案内人」が同行して行う自然に入り込むための瞑想や「五感エクササイズ」が提案される。その一方で、大斎原をはじめ、神倉神社のごとびき岩、那智の滝、大門坂などは「元気になるエネルギーに満ちた癒しのスポット」「ただそこに足を踏み入れるだけで、元気になる、気持ち良くなれる場所」として、一括して紹介されるのである。⁽²⁰⁾

こうしたスピリチュアルな語りは、伝統宗教にも影響を与えている。例えば熊野本宮大社のウェブサイトにある

宮司の挨拶でも、前半では熊野三山と神仏習合の歴史が語られる。だが、中盤で世界遺産登録が言及されると、「この熊野の天地と御社殿と人との調和のとれた一体感が、訪れる人々の心と体を癒し、それが現代^いまたパワースポット・スピリチュアルとして若い世代の人々から団塊の世代の方々まで注目を集めてい」るとされ、「心の切り替えの場」としての同社への参拝が勧められる。⁽²¹⁾ 伝統信仰の担い手である神職が、過去の信仰と現在のスピリチュアリティという使い分けを行っているのである。

近年の興味深い動向を挙げておけば、二〇一六年からはサントィアゴ巡礼と熊野古道の双方の巡礼を達成した人に、田辺市や熊野本宮大社が「共通巡礼達成証明書」を発行するようになっていいる。伝統信仰という点で、この二つの巡礼に共通点を見出すことは難しいだろう。両者をつなぐのは、メディア作品や世界遺産登録といった世俗の要因によって来訪者が増加し、寺社や教会といった宗教施設ではなく、そこに至る過程が重視されるようになったことだ。共通巡礼達成証明書に前出の本宮大社宮司の筆で「道」という文字が大書されているが、現代の巡礼のあり方を象徴的に示すものと言えるだろう。

サントィアゴ巡礼的なものの広がり

日本では、観光ブランドとして世界遺産の影響力がとりわけ大きい。世界遺産制度は地域の資産をグローバルに共有することを理念とするが、門田岳久は、そうしたまなざしが宗教文化に注がれる時、何が世界遺産にふさわしい信仰なのかという選別が行われることを指摘している。⁽²²⁾ それに倣えば、熊野古道の事例においても、何が現代の巡礼にふさわしいのかという選別が働き、その結果、歩くことそのものが前景化したと言えるだろう。そして、サントィアゴが先駆となったこうした巡礼イメージは、日本でさらなる広がりを見せている。

四国遍路についても、二〇一〇年、札所と遍路道の世界遺産登録を目指す推進協議会が設立されている。注目したいのは、そこで何が四国遍路の本質的価値とされたかだ。推進協議会によれば、文化財のような「有形的資産」によつて四国遍路の卓越性を主張するのは難しい。そこで持ち出されたのが歩き遍路である。同会は、歩き遍路こそが近世から現代に至る遍路の「基本」であり、「遍路者は四国遍路遺産の中核的価値の形成者である」としたのである。⁽²³⁾そして二〇一七年には、こうした歩き遍路のイメージ強化のため、ポスターが制作されている。ポスターの中心には、遍路装束をまとった白人と思われる人物が描かれ、画面全体が歩き遍路で埋め尽くされている。車も描かれているが、ほとんど歩き遍路で隠されており、一瞥するだけではわからない。また同年、サンティアゴの博物館で「四国遍路展」も開催し、歩く巡礼としての遍路を強くアピールしている。

しかし、実際のところ、現代の四国遍路において歩く人々は極めて少数だ。二〇一九年の調査によれば、そもそも遍路者数が一〇年前と比べて四割程度減少している。しかも、ほとんどはバスか自家用車による遍路だ。歩きは三〇程度であり、外国人遍路は〇・五%（約四〇〇人）にすぎない。⁽²⁴⁾実際に最も多く見られるのは「六十代の夫婦二人が自家用車で巡礼する」という形態なのだ。⁽²⁵⁾こうした現実との乖離を考えると、推進協議会の戦略は、信仰の場である宗教施設とそこへ直行する人々をあえて背景化することで、開かれた過程重視の巡礼路イメージを生み出すようにするものと言えるだろう。

さらに日本のカトリックにも、同種の傾向を指摘することができる。二〇一八年、長崎県の教会群が「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」として世界文化遺産に登録されたが、同物件の登録にあたって、早くから歩き巡礼化が模索されていた。二〇〇八年、長崎大司教も関わる形でNPO法人長崎巡礼センターが設立されてい

る。そのウェブサイトに「巡礼のしかた」教会堂を訪れたなら」という項目がある⁽²⁶⁾。内容は、教会が祈りの場であることを知っていれば誰もが巡礼者であり、何を祈っても構わないというもので、巡礼をカトリック信仰の観点から管理運営しようとする意図は見られない。

さらに注目したいのは、同センターが運営する五島列島の巡礼である。巡礼者用のバッジ、スタンプ帳が頒布され、五三の教会をめぐる大司教区によって巡礼証明書が発行されるというように、明らかにサンティアゴ巡礼を意識して作られている。そして、五島巡礼については長崎大司教区認定も謳われているのだが、山中弘によれば、この巡礼もやはり『改悛』といったキリスト教の教義的な文脈とは離れた、自己のアイデンティティの模索を意図した『心の旅』として位置づけられている⁽²⁷⁾のである。

五 結論

西欧において不可逆に進むように思われる教会離れの中、サンティアゴ巡礼は開かれた巡礼路として二一世紀になって多くの人を集めるようになった。カトリック教会は彼らを篤信者として、あるいは自覚なきままキリスト教へと導かれる無名のキリスト者的な存在として語るが、実際には彼らが伝統的な信仰と結びつくことは稀である。その巡礼体験は、信仰とは異なる文脈で生成流通するメディア作品や巡礼記によって方向づけられる。大聖堂の聖遺物はもはや巡礼の目的ではなく、そこに至る過程での交流体験が重視されるようになり、使徒ヤコブは巡礼者という肩書を有効化するための背景へと変質している。

こうした傾向はサンティアゴ巡礼においていち早く顕著になったが、そこに限られるものではない。本稿では、

日本において世界遺産登録運動と結びついて展開される巡礼言説について検討した。いずれにおいても、過去の信仰が巡礼の価値の源泉として示されるが、現在についてはむしろパワースポットや心の旅といったスピリチュアルな表現が用いられていた。日本と西欧の宗教風土は全く異なるが、巡礼の目的地がもはや巡礼の目的にはなりえず、その過程が重視される点では共通する。そして、それらの聖地巡礼においては、信仰の背景化が宗教的越境や寛容というイメージを支えているのである。

注

- (1) Brierley Consultancy (<https://www.brierleyconsultancy.com/>) 二〇二〇年五月五日最終閲覧。
- (2) Steve Bruce, *Secularization: In Defence of an Unfashionable Theory* (Oxford, Oxford University Press, 2011), p. 2.
- (3) John Eade and Michael J. Sallnow eds., *Contesting the Sacred: The Anthropology of Pilgrimage* (London, Routledge, 1991), David Chidester and Edward T. Linenthal eds., *American Sacred Space* (Bloomington, Indianapolis, Indiana University Press, 1995).
- (4) 星野英紀『四国遍路の宗教学的研究』法蔵館、二〇〇二年。
- (5) 山中弘編『宗教とツーリズム——聖なるものの変容と持続』世界思想社、二〇一二年。
- (6) フランシスコ・シングル編『聖地サンティアゴ巡礼の旅——日の沈む国へ』エンジン・ルーム出版事業部、二〇〇八年、五〇頁。
- (7) 以下の巡礼者に関する統計、図1、図2はサンティアゴ巡礼者受付事務所の統計に基づく (<https://oficinadelperegrino.com/estadisticas2/>)。
- (8) カトリック中央協議会「教皇ベネディクト十六世の二四六回目の一般謁見演説 スペイン司牧訪問を振り返って」 (<https://www.cbccatholic.jp/2010/11/10/7874/>) 二〇二〇年五月五日最終閲覧。
- (9) 日本カミノー・デ・サンティアゴ友の会「コンポステーラ (La Compostela: 巡礼証明書)」 (<http://www.camino-de-santiago.jp/about-santiago/credentials.html>)、括弧内は岡本による補足、二〇二〇年五月五日最終閲覧。

- (10) “Acreditación del número de km recorridos” (<https://oficinadelperegrino.com/peregrinacion/certificado-de-distancia/>)
二〇二〇年五月五日最終閲覧。
- (11) 横田直美「サンティアゴ巡礼の現代性——統計にみる近年の巡礼者増加を手がかりとして」『人文論究』五七(二)、関西学院大学人文学会、六八—六九頁。
- (12) Arthur Paul Boers, *The Way is Made by Walking: A Pilgrimage Along the Camino de Santiago* (Illinois, InterVarsity Press, 2007).
- (13) 詳細については岡本亮輔『聖地と祈りの宗教社会学——巡礼ツーリズムが生み出す共同性』(春風社、二〇二二年)の第七章を参照。
- (14) 土井清美「サンティアゴ・デ・コンポステラ」(星野英紀・山中弘・岡本亮輔編『聖地巡礼ツーリズム』弘文堂、二〇二二年)、二二—二三頁。
- (15) 東紀州地域振興公社「峠別・月別 熊野古道来訪者数」(http://www.kumanokodo-iseji.jp/higashikishu/number_visitors.html)、二〇二〇年五月五日最終閲覧。
- (16) 小田誠太郎「世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」——その足跡と課題」(『ECPR』えひめ地域政策研究センター、二〇一〇年)、二二六頁。
- (17) 熊野本宮観光協会「世界遺産 熊野古道と熊野本宮大社」(<https://www.hongu.jp/kumanokodo/>)、二〇二〇年五月五日最終閲覧。
- (18) 熊野本宮語り部の会「大斎原—おおゆのはら—」(<http://www.hongu-kataribe.jp/vocabulary/vc0007.html>)、二〇二〇年五月五日最終閲覧。
- (19) 厚生労働省・国土交通省近畿運輸局「世界遺産を活用した『ふくろの空間・癒しの交流』づくりに関する調査」二〇〇五年、二〇頁。
- (20) わかやま観光情報「熊野古道健康ウォーキング」(https://www.wakayama-kaniko.or.jp/pamphlet/15_kumankenko.html)、二〇二〇年五月五日最終閲覧。
- (21) 熊野本宮大社「宮司あいさつ」(<http://www.hongutaisha.jp/greeting/>)、二〇二〇年五月五日最終閲覧。
- (22) 詳しくは、門田岳久『巡礼ツーリズムの民族誌——消費される宗教経験』(森話社、二〇一三年)における斎場御嶽についての議論を参照されたい。

- (23) 「四国八十八箇所霊場と遍路道」世界遺産登録推進協議会「顕著な普遍的価値の証明」検討会報告書について」(<https://88sekaisan.org/subcommittees/pdf/20130228proof.pdf>)、二〇二〇年五月五日最終閲覧。
- (24) 四国経済連合会『新時代における遍路受入態勢のあり方——遍路宿泊施設の現状・課題等調査』二〇一九年。
- (25) 竹川郁雄「現代における四国遍路の諸様相」(愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター編『四国遍路の世界』筑摩書房、二〇二〇年)、二二二―二二三頁。
- (26) 長崎巡礼センター「巡礼のしかた〜教会堂を訪れたなら〜」(<http://www.nagasaki-junrei-center.jp/?cat=14>)、二〇二〇年五月五日最終閲覧。
- (27) 山中弘「宗教ツーリズムと現代宗教」(『観光学評論』四(二)、観光学術学会、二〇一六年)、一五三頁。

Pilgrimage without Belief

The Spread of Santiago-style Pilgrimage

OKAMOTO Ryōsuke

The revitalization of the Santiago pilgrimage route in the twenty-first century has been remarkable. The Camino de Santiago attracts pilgrims from all over the world. But many of them are pilgrims without belief. For them, the relics of the cathedral cannot be the object of a pilgrimage. What they value is the exchange experience of the pilgrimage process and the awareness and self-transformation. In this paper, we see this situation as the backgrounding of faith in the sense of a departure from the framework of traditional religion. A similar trend can be seen in Japanese pilgrimages that have been modeled after the Santiago pilgrimage. In other words, faith is seen as a thing of the past, and spiritual discourse is created about the present. Sometimes these spiritual discourses are also spun by actors on the side of traditional religions who should be the bearers of traditional belief systems.